

厚生労働科学研究費補助金（がん対策推進総合研究事業）
（総括・分担）研究報告書

放射線療法の提供体制構築に資する研究（23EA1012）
（分担課題名：放射線治療提供体制における認定看護師を中心とした「看護師モデル」の構築）

研究分担者 草間朋子
（東京医療保健大学 名誉教授）

研究協力者 有阪光恵（東京ベイ・浦安市川医療センター）、加藤知子（東邦大学）、
菊野直子（東京医療センター）、畑清子（埼玉医科大学国際医療センター）
三上恵子（昭和大学）、萬篤憲（東京医療センター）

研究要旨

放射線治療におけるがん放射線療法看護認定看護師（以下、「認定看護師」という）を中心とした看護体制を構築するための情報を入手するために266病院（「認定看護師」が配置されている全ての病院）を対象に質問紙調査（質問紙は職種ごと4種類）を実施し、175病院から回答を得た（回収率：65.8%）。350名の放射線腫瘍医、139名の看護部長、566名の外来・病棟看護師、196名の「認定看護師」が、それぞれの質問紙に回答した。90%以上の回答者が、放射線治療における「認定看護師」の配置の必要性を認めており、「認定看護師」は、「患者のケア」「相談」「指導」「教育」の業務を通して、患者及び看護師の放射線・放射線治療・放射線被ばくに対する不安を解消し、患者が放射線治療を安心して受けることができる状況の整備に貢献していることが明らかとなった。その一方で、回答した70%の「認定看護師」が満足のいく実践活動が実施できていない実態も明らかとなった。その理由として、病院の管理者の「認定看護師」に対する理解が不足していること、「認定看護師」が専門性を発揮できる就労環境（配置人数や配置部署、医療スタッフ間の情報共有の不足等）が病院内で整備されていないこと等があげられた。放射線治療の高度化、専門化が加速する中で、患者に安心な放射線治療を提供していく上で、放射線看護に関する専門性の高い「認定看護師」が、患者と最も近い距離で専門性を発揮できる環境を整備していくために、「認定看護師」の配置を施設要件・基準とすること、診療報酬の加算と結びつけること等を進めていくことが必要とされる。今後、これらの外形的要件を実現していくためのエビデンスを創出していくことが求められる。

A. 研究目的

放射線治療における「認定看護師」（がん放射線療法看護認定看護師）の役割を明らかにし、専門性を発揮できる職場環境を実現していくための情報入手を目的に本調査研究を行った。

B. 研究方法

「認定看護師」が配置されている全ての病院266病院（放射線治療を実施している病院の約30%）の、看護部長、放射線腫瘍医、外来・病棟看護師、「認定看護師」を対象に「認定看護師」の活動状況・課題等に関する質問紙調査を行った。入手したデータは記述統計分析、および帰納的分析を行った。本調査にあたって、所属する施設の倫理委員会から、倫理審査は不要であることを確認した。質問紙への回答は回答者の自由意思とすること、回答者の施設、回答者の匿名性を確保すること、質問紙への回答をもって調査への協力の同意が得られたものとする、結果を学術集会等で公表することを回答者に文書で説明し調査を行った。

C. 研究結果

1) 175病院から質問紙が返送された（回収率：65.8%）。質問紙への回答者は、看護部長139名、放射線腫瘍医350名、看護師566名、「認定看護師」196名であった。

2) 「認定看護師」が治療現場で実施している業務として、80%以上の「認定看護師」が、「患者・家族からの相談への対応」「患者・家族への放射線治療の補足説明」「放射線治療患者の症状アセスメント」「看護師に対する放射線看護の研修」「病棟看護師に関するコンサルテーション」をあげた。

3) 「認定看護師」の配置により変化したこととして看護部長は「熟練した看護技術を用いて水準の高い看護を提供できるようになった」（72.7%）、「放射線治療患者の不安が減少した」（69.1%）をあげた。放射線腫瘍医は、「治療中の患者へのケアが行き届くようになった」（98.6%）、「患者の治療に対する理解・協力が得られやすくなり治療がやりやすくなった」（87.4%）、「患者の放射線治療に対する不安が少なくなった」（83.0%）ことをあげた。看護師は、「認定看護師」を、「なんでも相談できる」（76.0%）「医師には質問しにくいことも質問できる」（62.0%）存在であると認識し、46.5%の看護師が「認定看護師」による教育活動を通して「放射線治療を受ける患者のケアに自信がついた」、21.0%の看護師が「放射線科に勤務すること（放射線被ばく）の不安が軽減した」と回答した。

4) 「認定看護師」の配置の必要性に関する質問（5択）に対する回答は、「とても必要である」及び「必要である」が、看護部長は97.1%、放射線腫瘍医は96.3%、看護師は93.2%、「認定看護師」は89.8%であった。
5) 70.9%の「認定看護師」が、「満足のいく実践活

動ができていない」と回答し、その理由として「病院管理者の「認定看護師」に対する理解が不足している」(38.1%)、「病院における「認定看護師」としての活動範囲が明確にされていない」(36.7%)、「看護師の「認定看護師」に対する理解が不足している」(32.4%)をあげた。

D. 考察

放射線治療における「認定看護師」の配置の必要性は90%以上の回答者が認めているにもかかわらず、約70%の「認定看護師」が十分な活動ができていない実態を真摯に受け止め改善していくことが、今後の課題である。ますます高度化が進む放射線治療をチームとして推進していくためには、放射線治療における「看護」及び「認定看護師」が果たす役割を関係者間で再認識し、「認定看護師」の配置を前提とした放射線治療における「看護モデル」を提供していくことの必要性を、本調査を通して再認識した。放射線治療病院における「認定看護師」の配置を促進していくためには、施設要件として義務化すること、診療報酬の加算対象にすることなどの外形的・制度的な整備を行うことが急がれる。

E. 結論

「診療看護師」を配置している病院を対象に、「診療看護師」の活動実態に関する調査を実施し、「認定看護師」に対する認識、配置(所属部署)、医療スタッフ間の情報共有のあり方等の就労環境における課題が明らかとなった。質問紙の自由記載欄には回答者から1000件以上の意見が記載されており、放射線治療における「患者との架け橋」、「医療スタッフ間の調整役」としての「認定看護師」に対する期待が大きいことが明らかとなった。今後は、自由記載欄の意見・コメントを帰納的に分析し、放射線治療の推進に向けて、看護の視点からの提案を行っていきたいと考えている。

G. 研究発表

・加藤知子、三上 恵子、有阪光恵、菊野直子、畑清子、萬篤憲、草間朋子:「がん放射線療法看護認定看護師(CN)」の活動実態と課題.看護展望(投稿中)

・畑清子、菊野直子、三上恵子、加藤知子、有阪光恵、萬篤憲、草間朋子:チーム医療としての放射線治療を看護の視点から考える.日本放射線腫瘍学会第37回学術集会

・三上恵子、加藤知子、有阪光恵、菊野直子、畑清子、萬篤憲、草間朋子:がん放射線療法看護認定看護師(CN)の専門性を発揮できる環境整備の必要性.第13回日本放射線看護学会学術集会

H. 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む。)

1. 特許取得
なし
2. 実用新案登録
なし
3. その他
なし